

清水寺・清水坂と室町幕府

細川 武 稔

はじめに

現在、京都で最も多くの参詣客を集めるのが清水寺である。その賑わいは平安時代、創建後間もない頃から見られたようで、「枕草子」に「さわがしきもの」として「十八日に、清水にこもりあひたる」が挙げられ、「今昔物語集」には清水観音に関する靈験譚が多く載せられている⁽¹⁾。中世後期、京都に拠点を構えた室町幕府にとつて、多くの人を集める清水寺と良好な関係を築くことは重要な課題だったと考えられる。

建武三年（一三三六）、九州から東上して入京を果たした足利尊氏は、光明天皇踐祚の二日後、清水寺に願文を納めた。

史料1 『常盤山文庫所蔵文書』⁽²⁾

この世ハ夢のことくに候、尊氏にたう心たハせ給候て、後生たすけさせをハしまし候へく候、猶々とくとんせいしたく候、たう心たハせ給候へく候、今生のくわほうにかへて、後生たすけさせ給候へく候、今生のくわほうをハ直義にたハせ給候て、直義あんをんにまもらせ給候へく候、

建武三年八月十七日

尊氏（花押）

清水寺

この文書は、尊氏自筆の文書として有名なものである。従来、主として

尊氏の隱遁志向や弟の直義との関係を考える材料として用いられているが、本稿では、これを清水寺と幕府の関係の出発点として捉え、その後の展開を見ていく。

また、寺の表参道である清水坂にも注目する。鴨川に架かる五条橋は、清水寺橋とも呼ばれ、五条大路の末は清水坂となつて寺へ達している（地図）。六波羅探題が近かつたこともあつて、鎌倉幕府は清水寺橋の修造に関与しており、室町幕府になつても、尊氏が清水坂に陣を敷いた⁽³⁾。本稿では、その後の清水坂について、清水寺および幕府との関係を分析していく。

第一章 御師の祈禱と慈心院

八代將軍足利義政の頃の様子を記した室町幕府の年中行事書には、將軍御所への参賀の様子が記されている。僧侶の年始参賀で最も早い日付は正月八日である。

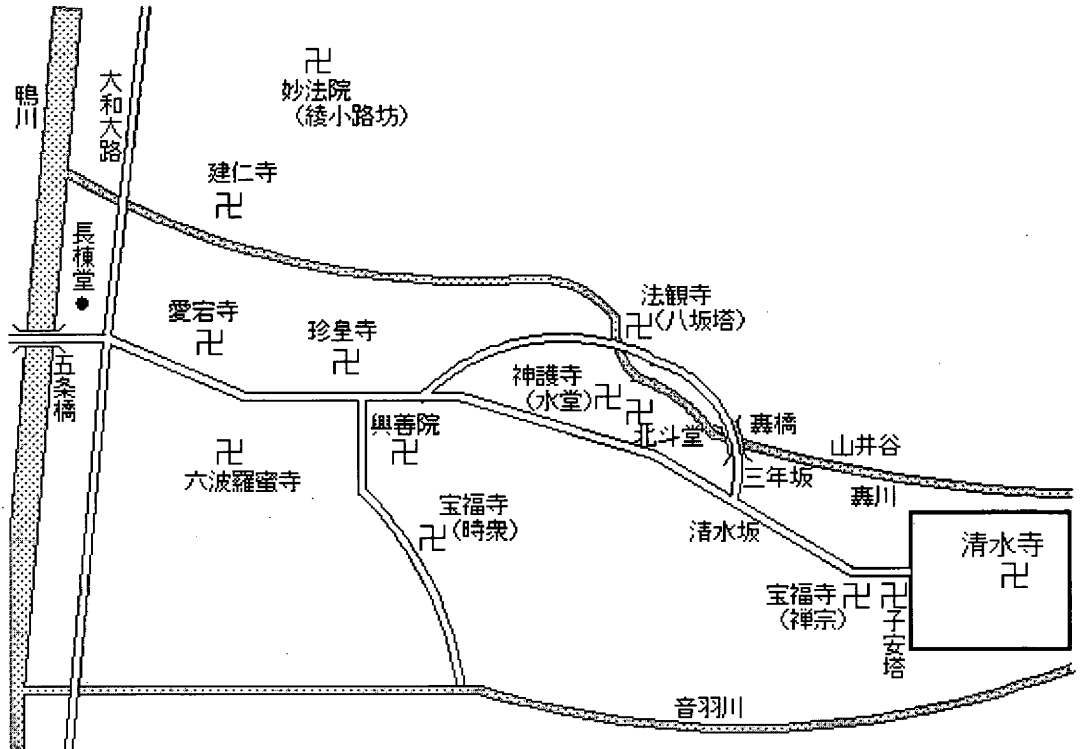
史料2 『長祿二年以来申次記』⁽⁴⁾

同（正月）八日へ評定衆、御供衆、申次衆、護持僧、法中、泰清

卿、（中略）

次 泰清卿参賀申也、扱申次さいのきはへ参て、法中と申入て、松

梅院、妙藏院、宝成院、密乘院、常浄院、常光院、清水寺慈心院、



地図 清水寺とその周辺

次 護持僧達、是は殿上人被_レ申_三次之_一、(後略)

ここでは、北野社の祠官である松梅院以下に加え、清水寺の慈心院が法中として將軍に對面している。清水寺では、執行が寺内の庶務一般を統括し、その次官として目代がいたが、慈心院は近世に目代を世襲した院家である。⁽⁸⁾筆者はかつて、北野社と清水寺がともに將軍の參籠先であることを指摘し、それゆえに幕府に重視され、他の僧侶より早く參賀の日が設けられたと推測したが、⁽⁹⁾清水寺の中でなぜ慈心院だったのか考えなければならぬ。この点について、幕府が命じた祈禱から探ってみよう。

清水寺は、たびたび室町幕府から祈禱を命じられた。その際発給された文書を「表 祈禱命令文書一覽」に示した。その中で、次の文書に注目したい。

史料3 『慈心院文書』(表No.14)
天下泰平御祈禱事、任_二御判之旨_一、可_レ被_レ抽_二精誠_一之由、所_レ被_二仰下_一也、仍執達如_レ件、
長享元年十一月四日
前加賀守(花押)
丹後守(花押)

清水寺御師兵部卿律師御房

宛所に見える「御師」とは、檀那のために祈禱を行う存在で、室町幕府の將軍を檀那とする御師については、北野社、石清水社、祇園社などにいたことが明らかにされている。⁽¹¹⁾右の文書を伝える慈心院も、將軍の御師として祈禱を行ったと考えられる。「表」の宛所を見ると、執行とそれ以外に分けられる。執行は、近世になると宝性院の世襲するところとなったが、それ以前は様々な坊から補任される職であった。⁽¹²⁾執行以外の宛所が多く見えるのは、幕府が執行という職とは関わりなく祈禱を命じたことを示し、それが特定の坊と結びつくことによって御師の成立につながったと考えられる。⁽¹³⁾

表 祈禱命令文書一覧

No.	年	西暦年月日	文書名	宛所	内容	慈心院	後鑑	史料
1	建武2	1335/05/07	足利尊氏御判御教書	清水寺	一天の太平・当家の長久を祈るため所領寄進	○	○	○
2	建武3	1336/06/07	足利直義御判御教書	清水寺執行法印御房	合戦につき観音経など説誦		○	○
3	建武5	1338/03/14	足利直義御判御教書 ※1	清水寺執行御房	天下静謐のため大般若経読誦		○	○
4	建武5	1338/05/30	足利直義御判御教書	清水寺美作律師御房	宝前で仁王経講読		○	○
5	貞和4	1348/06/01	足利直義御判御教書	清水寺寺僧中	天下静謐のため大般若経転読		○	○
6	観応元	1350/07/28	足利尊氏御判御教書	清水寺々僧中	凶徒対治のため大般若経転読		○	
7	観応元	1350/08/10	足利尊氏御判御教書	清水寺々僧中	凶徒対治のため観世音経転読	○	○	○
8	観応元	1350/12/20	足利義詮御判御教書	清水寺執行法印御房	凶徒対治のため大般若経転読			○
9	観応3	1352/03/29	足利義詮御判御教書	清水寺々僧中	天下静謐		○	
10	文和3	1354/10/23	足利尊氏御判御教書	清水寺兵部卿阿闍梨御房	天下静謐		○	
11	文和4	1355/07/18	足利尊氏御判御教書	清水寺々僧中	千寿王丸	○	○	○
12	延文元	1356/12/21	足利義詮御判御教書	清水寺兵部卿律師御房	代々の精誠は神妙	○	○	○
13	応永6	1399/11/09	足利義満御判御教書	清水寺執行	天下静謐			○
14	長享元	1487/11/04	室町幕府奉行人連署奉書	清水寺御師兵部卿律師御房	天下泰平	○	※2	○
15	延徳2	1490/12/27	足利義材御判御教書	清水寺	天下泰平	○		○
16	明応7	1498/04/22	室町幕府奉行人連署奉書	清水寺下坊	連々の御祈祷は神妙		※3	○

すべての文書は、国立公文書館内閣文庫蔵【清水寺文書】(和学講談所旧蔵写本、160-0025)に所収されている。
 「慈心院」欄の○：東京大学史料編纂所架蔵影写本「慈心院文書」(3071.62-183)に所収。
 「後鑑」欄の○：「後鑑」(「新訂増補国史大系」による)に「勢州社家文書」として所収。
 「史料」欄の○：「清水寺史」第三巻「史料」に所収。
 ※1 【清水】126(1996年)に「清水寺史資料発見」として清水寺蔵の正文を掲載。
 ※2 【清水文書】として所収。
 ※3 【清水寺文書】として所収。

ただし、慈心院という院号は祈禱命令文書の文面には確認できず、他の史料でも、史料1などの年中行事書⁽¹⁴⁾に見えるのが早い例である。將軍の御師という点で慈心院と共通する北野社松梅院および祇園社宝寿院の場合、御師としての活動は初代將軍尊氏の時から見られるものの、院号の成立は三代將軍義満の頃とされており、慈心院の場合も、実績を積み重ねる過程で院号が成立したと考えられる。

慈心院には、轟坊という別名があり、近世の地誌にその由来が記されている。

史料4『雍州府志』⁽¹⁶⁾
 轟ノ橋 在リ清水寺堂ノ西ニ、參詣ノ人歴テニ斯ノ橋ヲ入ルレ堂ニ、古ハ慈心院在リニ斯ノ傍ニ、故称ス轟ノ坊ト、今在リニ鐘樓ノ東ニ、

史料5『山州名跡志』⁽¹⁷⁾
 轟ノ橋 在リ三田村堂ノ前ニ、轟ノ號アル事ハ、此所ノ舊號也、轟ノ房トイフハ、今ノ慈心院是也、一ニ曰ク、轟ノ橋トハ、古ハ門前無キニ人家ノ時、山ノ井ノ谷ニ南北ニカクル橋也、慈心院此ノ橋ノ上ニアリシト、本堂ノ西、田村堂の前に架かる橋を轟橋といい、史料4によれば、かつてその傍らにあった慈心院は橋の名に因んで轟坊と呼ばれたという。これが院号成立前の呼称であろう。鐘樓の東にあるとされるのは、享保三年(一七一八)に復興された現在の慈心院(隨求堂)につながるもので、中世から近世にかけて位置の移動があったことになる。

一方、史料5の後半では、轟橋について異なる説が挙げられている。それは、轟橋は山井谷に架けられた橋で、慈心院はその上にあつたというものである。山井谷とは、三年坂の下を流れる川が作る谷のこと⁽¹⁹⁾で(地図)、坂の登り口にあたる場所に架かる橋を轟橋とする説は、近世に編纂された他の地誌にも多く見られる。橋の下を流れる川は轟川と呼ばれるので、轟橋とは当初こちらの橋を指していたのではなからうか。そ

うなると、轟坊の位置も当初三年坂付近だった可能性がある。『天台座主記』永久元年(一一一三)三月二十八日条には、延暦寺の大衆が「清水寺僧房百餘房」を破壊したとあり、清水坂や三年坂周辺には清水寺僧の坊舎が多く建ち並んでいたと考えられる。轟坊もその一つだったのであろう。

舞の本『伏見常葉』には、三人の子を連れて清水寺の観音に参詣した常葉御前が、「轟の御坊」に移って聖と対面する場面がある。⁽²³⁾舞の本は中世末期以降の成立だが、これに先行して中世前期に成立した『平治物語』の同じ場面では、「師の坊」とされている。⁽²⁴⁾中世後期に轟坊が有力な坊として台頭したために、舞の本で具体的な坊の名称が語られるようになったのではないか。そして、室町幕府との関係を深めることによつて、本堂の近くに坊舎を構えるようになったとも考えられる。

ところで、豊臣秀吉や江戸幕府は、清水寺領の中で慈心院領二十石を特記して安堵しているが、その理由については、慈心院が代々目代を勤めてきたからだとする説がある。⁽²⁵⁾しかし、これでは執行を世襲した宝性院が特記されていないことを説明できない。執行や目代といった職とは別に、慈心院が將軍の御師として寺内で最有力の院家としての地位を獲得し、それが後代に反映されたのではなからうか。

さて、慈心院を通じた祈禱命令の伝達が確立した一方、古代からの系譜を継ぐ国家的祈禱は別の経路で清水寺に命じられた。それは、本寺である興福寺を通じてのものである。大石雅章氏が明らかにしたように、清水寺は「興福寺方七大寺」の一つで、朝廷からの祈禱命令は興福寺別当から清水寺別当に伝えられた。清水寺別当も興福寺僧だったため、清水寺が京都にあるにもかかわらず、祈禱命令は京都から奈良に伝えられ、さらにその内部で伝達されるという経路をたどったのである。実際に清水寺で祈禱を行うためには、そこからもう一度京都に伝えなければなら

ない。この形式は、次のような事態を引き起こした。

史料6『大乘院寺社雜事記』文明元年(一四六九)四月五日条⁽²⁷⁾

清水寺別當職事、昨夕宣下到来、被_レ仰_レ付浄法院僧正任円、松林院僧正辞退之闕云々、彼辞退ハ、近日東山在々所々放火、清水一所相残、於_二于今_一者可_レ謂_二高名_一歟、以後事難_レ成_二安堵_一、兼又細々御祈禱事被_レ仰_二出之_一、路次難治時分、上下儀一向難_レ計之間、院家計會時分、旁以迷惑之間、此子細申入辞退了、祈禱命令が出されても、応仁・文明の乱にともなう混乱で京都・奈良間の行き来が不自由なために困難が生じるので、清水寺別当を辞退するという。これに比べ、慈心院に直接伝える方法ははるかに合理的だと言える。

幕府と結びつくことによつて勢力を伸ばした慈心院には、將軍以外からも祈禱が命じられるようになった。

史料7『宣秀卿御教書案』明応元年(一四九二)⁽²⁸⁾

御祈禱事被_二聞食_一畢、殊可_レ被_レ致_二精誠_一者、

天氣如_レ此、仍執達如_レ件、

十一月三日

左少弁判

表書同、

以量朝臣伺申云々、

慈心院律師房

不書御字、

窓円、清水寺也、

このように、論旨も慈心院に宛てて出されたほか、同年の関白御教書は「清水寺御師法印轟御坊」宛に出されている。⁽²⁹⁾慈心院(轟坊)は、公武を問わず御師として活動するようになったのである。

以上の分析から、慈心院が將軍御所参賀の構成員となったのは、御師だったからであることが明らかとなった。慈心院と同じ正月八日に参賀した北野社の祠官には、將軍御師の松梅院も含まれており、同日に將軍家護持僧も参賀したことを考えると、慈心院は將軍のために祈禱を行う

(23) 清水寺・清水坂と室町幕府(細川)

存在として幕府から承認を受けていたと言えよう。三枝暎子氏は、「室町幕府は、御師職を梶子として顕密寺社を自己の管理下に置こうとする意図を持っていたと考えられる」と述べており、清水寺もその一例ということになる。「表」の祈禱の内容を見ると、大般若経や観音経など經典の読誦となっており、祇園社等の御師の例と共通する。御師は、密教の修法を行った護持僧と役割を分担していたと考えられる。章を改めて、清水寺における祈禱の特徴をさらに見ていくことにしたい。

第二章 観音懺法と禅僧

經典読誦による祈禱は、禅宗とも共通する。原田正俊氏によれば、禅林における祈禱で一番多用されるのは大般若経で、これを読む大般若会が行われたほか、經典を読誦して懺悔する懺法も重要な祈禱法会であった。⁽³²⁾そして清水寺では、実際に禅僧による懺法が行われていた。それが、南禅寺僧による懺法である。「蔭涼軒日録」長禄三年（一四五九）十月十五日条に「南禅寺毎月於清水寺懺法有之、但自勝定院殿御代之御發願也」とあるように、四代將軍足利義持（勝定院殿）によって始められたもので、幕府の祈禱体制の中に位置付けられる。この懺法の性格は、次の史料によって明らかとなる。

史料8 『蔭涼軒日録』文明十九年（一四八七）六月二十三日条（適宜改行を施した）

懺法書立、

天龍寺普明閣懺法毎月十八日、勝音閣御懺法時者十五、

南禅寺
當寺懺法毎月十七日、南禅寺、就清水寺修禮之、同十八日毘盧□行之、今十八日於方丈勤之、

相国寺
當寺圓通閣懺法毎月十七日也、今者於方丈勤之、相国寺□、

建仁
當寺方丈慈視閣懺法毎月十九日、人衆十員、建仁寺□、

東福
寺家懺法事、正月五箇日於方丈勤之、二月初午同前、六月十八日於妙雲閣勤之、毎月十八日先規於方丈雖勤之、近代依闕乏略之、東福寺、

當寺懺法事、毎月十八日也、於方丈勤之、万寿寺、

當寺懺法毎月十八日於方丈勤之、等持寺、

梵音閣懺法毎月十八日、乱前如此、臨川寺、

此八通供 台覽、

右の書立は、八代將軍足利義政が諸五山における毎月の懺法の日程を尋ねたのに対し、各寺院から提出されたもので、すでに原田氏によって紹介されており、筆者も言及したことがある。⁽³⁶⁾これによれば、京都の五山および十刹の禅院で懺法が行われる中、五山之上という最高の寺格を有する南禅寺の分のみが清水寺で行われていたことが分かる。「蔭涼軒日録」延徳三年（一四九二）正月十七日条に「午刻詣清水寺、南禅寺衆三十三員修懺聽之、唱観音經則歸」とあるように、この懺法は観音経を読誦する観音懺法で、毎月十七日、南禅寺の僧三十三人が清水寺に赴いて懺法を行った。その内容についてさらに詳しく見てみよう。

史料9 『南禅日記』長禄三年（一四五九）条⁽³⁷⁾

清水寺御祈禱懺法定衆三十三人、此外補闕十一人也、

清水寺懺法料請取

請取

御祈禱清水寺懺法料所羽崎庄公用事、

合拾貳貫五百文、
右、為三月充一攸請取一如件、
年号幾年支干月日 維那某判

西堂某判
南禪寺

雜掌之
名字官殿
納幾貫文云云、

右、以三德雲侍真、折紙自一初井方一請取之、(已上詳見二年中行
事須知録)一、
(中略)

懺法机(裏南禪寺常住之書付有之)・若干脚并暖席・若干疊、
右、至レ今現レ在清水寺本堂、

葦菴藥云、大机子三脚(導師、香華、自皈)・小机三十箇・暖席十
八疊、常置之清水寺一矣、南陽鳳和尚寄進焉、

史料10『南禪旧記』永正十五年(一五一八)条⁽³⁸⁾

飯雲式云、清水寺懺摩、先前日以三折紙相觸也、毎月十七日齋了、
赴三清水寺、古者於三德雲院一讀之、雖レ然末代無一断絶一様、廷用
和尚寄三附常住一故、德雲院衆不レ加三補闕一、一超直入也、但乱前、
宗英藏主參暇迫而被レ削籍、后被三出頭一問、被レ加三補闕一云云、
依三其仁一直入、依三其仁一補闕乎、
清水寺懺摩鉞図并坐牌図三十三員、(已上詳見三飯雲式一)一、

嚙金引付
拾貳貫百文 布施三千四員分、加佛布施云云、
已上拾貳貫五百文

右從三濃州一貳拾貫文月別上、御倉奉行初飯納^{井平}之、其内拾貳貫五百
文、自三寺家一請取之、

今代壁書
定
清水寺懺摩諸役者事、

一(導)道師、參暇西堂衆如三先規一可レ勤レ之、若有三一人爲三不器用一者、
爲三其仁一可レ情一本衆首座勤旧一、但雖レ不レ勤三導師一、滿散焼香者、
可レ爲三出世仁一、雖レ背三古規一、因三其才乏一如レ斯、若於レ有三器用一
者、可レ爲レ如三旧規一事、

一香華、单寮以下、爲三本衆一輪次可レ勤レ之、若不器用、爲三其仁一
可レ雇三衆中一事、

一鉞鼓、可レ爲レ如三先規一、雖レ然於三不器用一、爲三其仁一可レ雇三衆、
但位次者、自他可レ隨宜事、

右攸レ定如レ件、

永正十五年十月日

堂司

前代壁書、詳見于飯雲式并葦菴藥、

『南禪旧記』は、弘安元年(一二七八)から慶長十一年(一六〇六)ま
での南禪寺の歴史について、現在所在が確認できない史料も引用しなが
らまとめたもので、右の史料9・10から多くのことがわかる。当初、懺
法は南禪寺塔頭の徳雲院が担当していたとされる。院主の廷用宗器が足
利氏の出身(義持の叔父)だったため、幕府の祈禱に適任とされたので
あろう。断絶しないようにという廷用の意図によって、南禪寺全体の行
事となったのである。懺法に際しては定衆三十三人と補欠十一人が選定
された。徳雲院の僧は、廷用以来の由緒により、原則として補欠を経る

ことなく定衆に加わったという。また、懺法料所として美濃国羽崎荘が設定され、年貢は御倉奉行の初井氏を通じて南禅寺に納入された。⁽⁴⁰⁾ 実際にはしばしば懈怠があり、南禅寺からの訴えも見られるが、そこで「懺法御布施」と呼ばれているように、將軍からの布施という形をとっている。

一方、史料8では十八日に行くとされている「毘盧□」については、詳しいことは分からない。ただし、『蔭涼軒日録』永享八年(一四三六)七月十七日条に「來十八日清水寺御祈禱、栖真院觸穢之故、今月則可_レ自_レ德雲院取調上之旨有_レ命、以後乃可_レ復_レ舊也、回向御銘被_レ遊」とあり、栖真院と德雲院はともに南禅寺の塔頭だから、十七日の南禅寺僧による観音懺法と連動したものだったと考えられる。

⁽⁴²⁾ 清水寺が懺法の場選ばれたのは、本尊が十一面千手観音だからである。観音の縁日は、一般に十八日とされるが、清水寺の場合は十七、十八日の両日とされ、二日間わたる南禅寺僧の祈禱もこれと対応したものである。史料1の尊氏願文が十七日に書かれたのも偶然ではなからう。また、『満濟准后日記』⁽⁴⁴⁾ 応永三十四年(一四二七)正月十八日条には、義持が「近年ハ大略今日清水寺御参詣」しているとある。義持は、自らが発願した祈禱を聴聞するのを恒例としていたのだろう。観音に関わる祈禱のうち、五山之南禅寺の分を、他の寺院とは異なり二日間にわたって清水寺で実施したという事実は、幕府が清水寺を観音霊場の最高峰と見なしていたことを示す。

このような観音懺法は、前章で触れた御師の祈禱とどのような関係にあるのだろうか。注目されるのは、懺法が恒例化した時期は、第一章の「表」に見られる祈禱命令の空白期間にあたることである。つまり、御師をはじめとする清水寺の僧が、幕府が開かれて間もない動乱期において、凶徒対治など特別の願意を込めた臨時の祈禱を担当したのに対し、

南禅寺の僧は、情勢が安定した段階になってから、毎月恒例の懺法を担当するようになったのである。⁽⁴⁵⁾ 懺法の発願者である義持は、歴代將軍の中でも群を抜いて禅宗に帰依する心が深かったことで知られ、清水寺の禅宗色を強めようという意図があったのではなからうか。観音懺法以外でも、永享十二年(一四四〇)、足利義教が南禅寺の都間に清水寺造営を命じているように、南禅寺と清水寺は、ともに東山に位置するという距離の近さもあつてか、深い関係にあつたようである。

第三章 清水坂の禅院―將軍参籠と宝福寺―

前章では、清水寺で南禅寺の僧が活動していた様子を確認したが、清水寺の門前で参道でもあつた清水坂において、禅宗はどのような様相を見せていたのであろうか。手がかりとなるのが、観音懺法を始めた義持の清水寺参籠である。⁽⁴⁸⁾

史料11『満濟准后日記』⁽⁴⁶⁾ 応永二十九年(一四二二)四月七日条

御所様今日清水寺御参籠、宝福寺二御座、毎日御参詣云々、

史料12『満濟准后日記』⁽⁴⁷⁾ 応永三十一年(一四二四)九月十六日条

自_レ今日一公方様清水寺御参籠、御座所宝福寺如_レ先々、

参籠といつても清水寺に籠もつたわけではなく、宝福寺を宿所としてそこから毎日清水寺に通つたのである。宝福寺を「清水御参籠所」と呼んだ例もある。⁽⁴⁹⁾ 第一章で触れた將軍御師の慈心院(轟坊)は宿所とはなっていない。新城常三氏によれば、「御師の機能は、祈禱と参詣宿とにあるが、発生史的には前者が後者に先行した」といい、清水寺の場合、御師は祈禱に限定された役割を担つたのであろう。

さて、宿所となつた宝福寺とはどのような寺院だったのであろうか。⁽⁵¹⁾

東山の宝福寺といえ、火葬場を管理していた時衆寺院(四条道場金蓮寺末)が知られるが、それとは別に禅宗の宝福寺も近くにあつた。

史料13 『山城名勝志』⁽⁵³⁾

〔禪宗の宝福寺〕

○宝福寺へ旧跡在清水坂一、子安塔西、中光院東也、南限谷、

至于今建仁塔頭如是院領、

幻居山人隨筆云、宝福寺へ東山、夢窓、古菴普紹、

へ建仁如是院記云、開基古菴嗣夢窓一、如是院第三世從九峰以
來為當院領、

異本年代記云、宝徳三年正月二十六日清水子安塔・宝福寺等

炎上、

〔時衆の宝福寺〕

○宝福寺へ旧跡在六波羅寺東・法園寺北一、土人呼南無地藏一、

四條道場金蓮寺管領、本尊弥陀像并地藏尊、今在金蓮

寺一、一遍上人・他阿上人・浄阿上人墓在此地一、清水

坂宝福別院也、

禪宗の宝福寺は、子安塔の西にあつたとされる。応仁・文明の乱以前の
京都を描いた『中古京師内外地図』⁽⁵⁴⁾にも、清水寺のすぐ近く、子安塔と
思われる三重塔の西側に宝福寺の名が記されており、清水坂をかなり下
つた場所にある時衆の宝福寺よりも参籠の宿所としてふさわしい(地
図)。この禪宗宝福寺は、史料13にあるように、のちには建仁寺如是院
に吸収されたため、建仁寺関係の書物に由緒が記されている。

史料14 『東山塔頭略伝』⁽⁵⁵⁾

○宝福寺

足利宝篋相公之子宝福寺殿道英童真、乃鹿苑相公之兄、五歳而逝、
造建此寺一、為香火場一、舊在洛東清水坂一、応仁年間罹兵

火一、由是移址于建仁山中一、舊址今存、

開基古菴和尚

師諱普紹、號古菴、嗣法夢窓国師一、久在土佐州五臺一、出住
京之安国一、後為宝福第一世一、明徳四年癸酉正月五日示寂、延

宝伝灯録有伝、

極先名周初 宝徳院下畧記、

貞叟名梵利 別號道遥、歴諸刹後位建長一、

玄峯名中通 歴諸刹後位円覚、

笑鄂名周歆 歴諸刹後位建仁一、へ第九十五世、

勉仲名周勳 歴諸刹後位建長一、

周泉

此後如是院兼管之、

●大慈菴

●福寿菴

此二菴並属宝福一、不詳開基之人一、今廢、

○宝徳院

開基極先和尚

師諱周初、號極先、嗣法古菴紹禪師一、為宝福第二世一、初住
中興寺一、へ備后州定先山一、後住建仁一、へ第八十三世、創宝
徳於宝福寺側一退休、無幾廢絶、世次不詳、

宝福寺は、二代將軍義詮(宝篋相公)の子道英の菩提所とされる。この
人物は三代將軍義満の兄にあたるが、若くして亡くなった。宝福寺で執
り行われた三十三回忌は、『空華日用工夫略集』⁽⁵⁶⁾嘉慶元年(一三八七)

七月十九日条に「赴宝福寺請一、道英童真三十三諱陞座、府君入寺、

諸山閑人老宿皆來会」とあるように、義満が入寺し、義堂周信をはじめ

五山の高僧たちがそろって参列するなど盛大なものであつた。

三十三回忌が行われた嘉慶元年から逆算すれば、道英は文和四年(一
三五五)に亡くなったことになる。これに該当するのが、『賢俊僧正日

『記』文和四年七月二十二日条に「若御前他界了、未刻、今夜送法福寺、彼寺僧沙汰申云々」とある人物で、「法福寺」とは宝福寺のことであろう。これが禅宗の宝福寺だとすると、道英の死去をうけて創建されたとする史料14の記述と矛盾する。史料13では、清水坂の宝福寺(禅宗)が時衆の宝福寺の別院とされているので、道英の葬送は時衆の宝福寺で行われ、その後清水寺門前に同名の禅宗寺院が菩提所として創建されたと考えることもできる。

道英死去の四日前に発給された文書が慈心院に伝わっている。

史料15『慈心院文書』(表No.11)⁽⁵⁸⁾

千寿王丸祈禱事、近日殊可被致精誠之状如件、

文和三年七月十八日

(華氏)
(花押)

清水寺々僧中

この千寿王丸が道英その人にあたり、死去直前に病氣平癒の祈禱が清水寺に命じられたと考えられる。すなわち、禅宗の宝福寺は、地理的な近さのみならず宗教的な面でも清水寺とつながりを持つ寺院として創建されたのである。將軍の清水寺參籠の際宿所とされるには、まことにふさわしい寺院だったといえよう。

宝福寺を創建したのは、夢窓疎石の弟子古菴普紹で(史料13・14)、その後住持職は、極先周初、貞叟梵利、玄峯中通、笑鄂(罽)周歆、勉仲周昂と、代々古菴の法系に連なる僧が継承した(史料14)⁽⁵⁹⁾。永享十一年(一四三九)には六代將軍義政、寛正六年(一四六五)には八代將軍義政が、住持職を「輪番」にするという決定を下しているが、古菴が千寿王丸の菩提所を創建したという由緒を重視し、その法系の中で住持職を受け継いでいくことを認めたものと考えられる。その結果、この法系は宝福寺を拠点とすることになり、「清水宝福派」と呼ばれた⁽⁶¹⁾。また、

極先は宝福寺に近接して宝徳院を創建したが(史料14)、ここが宝福寺住持の隠居所となったようで、笑鄂と勉仲の入院が確認できる。このほか、大慈庵と福寿庵が宝福寺に属しており(史料14)、『蔭涼軒日録』永享十一年(一四三九)四月二十五日条に「宝福寺・宝徳庵・大慈庵・福寿庵具足等可渡新住持玄峯西堂之旨有命」とあるように、四ヶ寺一括して伝領されたようである。

また、義教によって関所の寄附や造営が行われ、宝徳三年(一四五二)に焼失した(史料13)ものの、まもなく再建されたらしく、寛正三年(一四六二)には義政が宝福寺御成の後清水寺に参詣している⁽⁶⁴⁾。宿泊してはいないが、義持の場合と似た事例と言える。寛正五年(一四六四)、義政の母日野重子の菩提所である勝智院修造の参考とするため、蔭涼職季瓊真薬は義政の命で東山の寺院を調査しているが、五山の南禅寺、建仁寺、東福寺、七代將軍義勝の菩提所慶雲院などと並んで宝福寺を訪れている⁽⁶⁵⁾。また、寺領としては、播磨国賀屋荘の地頭職を持っていたことが知られる⁽⁶⁶⁾。このように宝福寺は、清水寺參籠の際宿所とした義持だけではなく、歴代將軍が重視するところとなっていた。

第四章 清水坂の律院―「水堂」神護寺―

清水坂には、癩者を含む非人が住んでいた⁽⁶⁷⁾。宝福寺の東隣にあった子安塔の縁起に、光明皇后が浴室を建立して癩病の法師の体を洗ったところ、法師が仏となって現れたという話が載る⁽⁶⁸⁾。このような話が縁起に入っているという事実は、非人救済の場という清水坂の性格を示す。そして、清水寺の滝の水が癩病を治すと考えられていたという⁽⁶⁹⁾。

水という点に注目すると、清水坂に「水堂」と呼ばれる律院があった。

史料16『東寺私用集』第三 東寺長者補任 永享八年(一四三六)⁽⁷⁰⁾

十一月廿九日夜、八坂塔婆へ五重、太子御建立、雲古寺へ阿弥陀

佛、座佛居長四文、極樂堂・水堂（律僧）、草琳寺（時宗）、清水坂之在家等火云々、佐々木ノ藏知在所ヨリ火出了、

ここで八坂塔などともに焼失したとされている水堂は、『陰涼軒日録』文明十九年（一四八七）五月十六日条に「清水坂神護寺者號『水堂』」とあるように、神護寺という寺号を持っていた。筆者がかつて述べたように、この神護寺は、正月に室町幕府への参賀を行う律院の一つで、幕府のための祈禱も行った。以下、清水寺との関係を中心に、神護寺の実態を明らかにしていきたい。

史料17『雪村行道記』

（貞和二年十二月二日）般涅槃于位、朝市山林嗟悼慟哭、後三日闍維于清住菴、

舊址直北斗堂下、今水堂界内、相博大龍地、蘭洲和尚後取扁其塔、

貞和二年（一三四六）、建仁寺住持の雪村友梅が死去し、清水坂の清住庵で荼毘に付されたが、その地は「大龍地」との相博によって水堂の界内になったという。「大龍」とは雪村の菩提所として創建された建仁寺塔頭大龍庵のことで、その場所は建仁寺の南端に位置していたことが『東山往古之図』からわかる。相博の経緯は以下のようなのである。

史料18『雪村行道記』

明年丁亥（貞和三年）、円心特創塔院於維之建仁、以下其地、又明年春蒙綸命并鈞旨、迺取生祠扁曰大龍、

（中略）

塔曰幻空、割膏腴以奉香火也、

初清住其地太狹隘、議相博今地、清水教寺衆議遷遠三年、蘭洲和尚為芳藏主時、以清水為南都興福所管、往反陳訴、故興福衆徒吹貝撞鐘、會議者三度、貞和三年三月四日相博、四年二月

二日興福清水本末両議治定、綸旨并鈞旨有之、秋八月廿四日円心寄進播州大津莊、又移其私第一宇開基云、師滅後五歳、觀応元年正月十三日薨、享年七十四、葬于播之大龍之右、

雪村の弟子蘭洲良芳が、相博について交渉した相手は清水寺とその本寺興福寺であった。すなわち、清住庵があった地は、相博によって清水寺領になったと考えられる。相博に際しては「綸旨并鈞旨」が発給されており、朝廷と幕府の関与が確認できる。実際には、『弘宗定智禪師行状』に「丁亥（貞和三年）建大竜ノ塔、大休寺殿左武衛將軍施其基址」とあるように、初代將軍尊氏の弟である直義（大休寺殿）が主導したと考えられる。

史料17と史料18を合わせて考えると、相博によって清水寺領になった地に創建されたのが水堂ということになる。つまり、水堂は清水寺と関係の深い堂宇といえる。史料17の「今」とは、『雪村行道記』が撰述された永享四年（一四三二）のことだから、相博後、十五世紀前半までの間に水堂が創建されたのである。なお、史料17に「北斗堂下」とあることから、水堂の位置も見当がつく（地図）。北斗堂の位置は清水四丁目北側とされるが、近くには轟川が流れており、水堂の名称は川の水に因むものかもしれない。

次に、律院としての性格を探っていく。天文十四年（一五四五）、神護寺とともに幕府へ巻数を進上した寺院として、法勝寺の名が見える。

法勝寺は、鎌倉末期、天台宗の大乗戒である円頓戒の宣揚に努めた恵鎮（円観房）が大勧進、住持となるにおよんで、律院となったことが知られる。法勝寺の歴代住持を記す『天台円頓妙戒都鄙代々住持次第』には、第十世の宝助のところに「神護寺」と記されており、神護寺は法勝寺流の律院だったと考えられる。ただし、永和三年（一三七七）の『法勝寺興行条々』には、法勝寺の末寺が多く書き上げられているが、その中に

神護寺は出てこない。一方、色井秀讓氏によれば、『菩薩門頓授戒灌頂記』宝戒寺卷子本の奥書から、正長二年（一四二九）に「前任法勝神護寺沙門宝助」が在世していたことが確認できるといふ⁽⁸¹⁾。管見の限り神護寺の史料上初見はこの正長二年で、宝助が開山である可能性もある。

松尾剛次氏によれば、恵鎮門流の天台律僧も、西大寺流律僧らと同じく非人救済を行ったといふ⁽⁸²⁾、神護寺の場合、寺の通称にもなった水が注日される。清水坂の救済施設としては、下坂守氏が分析した五条橋近くの長棟堂が知られるが（地図）、清水寺に直接関係した建物ではないといふ⁽⁸³⁾。癩者が清水坂に居住した一因に、清水寺からの水が病を治してくれるという信仰があつたとすれば、清水寺に關係する救済施設があつても不思議ではない。それが、清水寺領に創建された神護寺だったのでなかろうか。

神護寺と關係の深い寺院として、崇福寺があつた。『蔭涼軒日録』文明十九年（一四八七）五月十六日条に「清水坂神護寺者號永堂、崇福寺一體之也」とある。「一體」の具体的内容は不明だが、あるいは神護寺と兼任となつていたのであろうか。

史料19『蔭涼軒日録』文明十八年（一四八六）七月十五日条

等持寺本尊之事相尋、則非舊本尊、四條辺有律寺、曰崇福寺、於爰有^レ此佛、買以安置、大於^レ舊本尊者莫大也、相公曰、舊本尊者小也、御覚在^レ之云々、

崇福寺は四条付近にあり、応仁・文明の乱後その仏像が等持寺本尊とされたことがわかる。それ以前の等持寺本尊は地藏菩薩だったので、崇福寺から移されたのも地藏菩薩であろう。等持寺は將軍家の菩提寺であり、幕府と崇福寺のつながりがうかがえる⁽⁸⁴⁾。恵鎮門流は地藏信仰を布教していた可能性があるとされるから、神護寺も地藏菩薩を安置していたのではなかろうか⁽⁸⁷⁾。尊氏以来の足利氏による地藏信仰は、勝軍地藏との関

連で説明されることが多く、清水寺の脇侍も勝軍地藏だった⁽⁸⁸⁾。地藏を介して幕府・清水寺・神護寺の三者が結びついていた可能性を指摘しておきたい。

神護寺は、加賀国と讃岐国に有していた寺領について幕府から直務を認められたり⁽⁹⁰⁾、担当の寺奉行も置かれるなど、幕府に重視されていたが、特筆すべきは將軍の訪問をうけたという事実である。

史料20『建内記』永享十二年（一四四〇）二月十九日条

室町殿渡^レ御妙法院門跡、於^レ永堂先着^レ御々装束云々、先々於^レ小松谷^レ着御也、而彼長老不快之故欵、入^レ夜還御云々、

史料21『蔭涼軒日録』永享十二年（一四四〇）二月十九日条

為^レ妙法院御成、先於^レ神護寺而御與被^レ召換、住持猷二千正、為^レ御礼被^レ參于御所、代謝而奉^レ還之、

將軍義教が妙法院御成に際し威儀を整えるため、恒例となつていた小松谷に代わつて神護寺に立ち寄っている。小松谷とは泉涌寺系律院の小松谷本願寺のこと、足利義満の弟満詮の子、玉峰善瑩が住持となるなど、幕府と近い關係にあつた⁽⁹²⁾。神護寺が代替地に選ばれたのは、妙法院に近いことに加え、系統は異なるものの律院であり、かつ幕府と關係が深かつたからであろう。この前年には、永享の乱の終息をうけて「関東静謐」の御成が広く僧俗を対象に行われたが、これに該当すると考えられる律院への御成は、小松谷を筆頭に太子堂（速成就院）、泉涌寺、不壊化身院、法勝寺、神護寺の順で行われた⁽⁹⁴⁾。法勝寺流の律院は二ヶ寺のみで、神護寺がいかに幕府に重視されていたかがわかる。また、幕府の奉行人飯尾永祥が著した『撮壤集』律院の項にも神護寺の名が見える⁽⁹⁵⁾。

神護寺に隣接していた北斗堂は、承安四年（一一七四）興福寺系の宿曜師珍賀が創建したもので、北斗星を祀り、北斗降臨院と号した⁽⁹⁶⁾。清水寺は興福寺の末寺であるから、北斗堂が清水寺の伽藍の一つと見なされ

ていた可能性は高く、清水寺参詣路の中でよく知られた堂宇だったことは間違いない。「北斗堂下」の地が相博によって清水寺領とされたのは、北斗堂の地と合わせて寺領をまとまった形にしようという意図があったからではなからうか。先に述べたように、相博の相手だった建仁寺は寺域に接する地を得ており、両者に共通する利益があったからこそ相博が成立したのであろう。

ところで、『看聞日記』⁽⁹⁸⁾ 応永二十四年(一四一七)十月二十九日条には「抑今夜清水之北斗堂焼失云々、白河院勅願寺也、其後後白河院御時炎上、其後于^レ今無為云々、冥慮如何々々」とある。しかし、白河院が建立したことで知られるのは法勝寺の北斗堂で、珍賀によって創建された清水坂の北斗堂ではない。記主の勘違いかもしれないが、法勝寺北斗堂の由緒が、法勝寺流の律僧が守護寺に住したことが原因となつて、隣の清水坂北斗堂に流入したとすれば、北斗堂と守護寺が密接な関係にあったという可能性が浮上する。息災・延命を祈る北斗法勤修が護持僧の役割とされるなど、將軍も北斗信仰を有していたから、北斗堂は幕府にとって注目すべき存在だったはずである。

おわりに

以上、清水寺と室町幕府の関係を、將軍の御師となつた慈心院、南禅寺僧による懺法、清水坂の禅院および律院という視点から分析してきた。その結果、幕府は、寺僧を御師とすることで清水寺と直接結びつく一方、寺内と清水坂に展開していた禪・律を通じた関与を維持することによって、重層的に清水寺とつながっていたことが明らかとなつた。多くの参詣者を集め、京都を支配するためには重要な寺院だけに、幕府の仏教政策の様々な面が現れていると言える。このような形が、幕府の衰退にもなつてどのように変化していくのか、近世への見通しを述べて結びと

したい。

応仁・文明の乱は、幕府の衰退を決定的なものにしたが、清水寺も文明元年(一四六九)、兵火にかかって焼失した。復興は寺僧ではない時衆の願阿弥が主導し、勧進によって修造を行う地位は本願職として受け継がれ、その居所は成就院と称するようになって寺内で大きな勢力を持つようになった。⁽¹⁰⁾ここに、將軍の御師である慈心院に対抗しような存在が誕生したのである。それによって慈心院がすぐに力を失つたわけではないが、將軍との結びつきは次第に見られなくなった。

南禅寺僧の清水寺における祈禱は、史料10に見えるように、戦国期にも行われたが、史料8には「今十八日於三方丈勤^レ之」とあり、応仁・文明の乱後、清水寺を離れ南禅寺で実施されることがあった。明応七年(一四九八)には、山科の浪人が道を塞いだために南禅寺僧が清水寺に赴くことができず、南禅寺方丈で行われている。⁽¹⁰⁾かつて南禅寺が関与した造営も、成就院の管轄するところとなり、清水寺と南禅寺の関係は希薄になつていった。

宝福寺は、史料13・14に記されているように、応仁・文明の乱で焼失した後、建仁寺山内に移され、同寺塔頭如是院の兼帯するところとなつた。延徳元年(一四八九)、義政の病氣平癒を祈つた寺院のリストでは、宝福寺が建仁寺十一ヶ所の中に含まれている。⁽¹⁰⁾また、延徳三年(一四九一)、足利義視供養のため経を納めた寺院として建仁寺や如是院と並んで宝福寺が挙げられており、⁽¹⁰⁾建仁寺に移された後もしばらくは寺院としての機能を保つていたことがわかる。ただし、位置の移動によって、清水寺参籠の際の宿所という機能は果たし得なくなり、従来のような清水寺との関係は消滅した。

守護寺への將軍御成は、八代將軍義政の代になると見られなくなった。律院に立ち寄つてから妙法院へ赴くという図式は、禅院から妙法院へ、

と変更された。多くの場合、神護寺にほど近い興善院が用いられ(地
図)、それが不可能な場合は建仁寺とされた。神護寺は、応仁・文明の
乱後もしばらくは清水坂にあったようだが、十六世紀前半、本寺である
法勝寺の近くに移転し、清水寺との関係が絶たれた。
このように、清水寺をめぐる複雑な諸関係は、応仁・文明の乱あたり
を境として、整理されていった。それは、清水寺及び清水坂から幕府の
姿が見えなくなることの意味し、清水寺はそれまでもあった庶民信仰
の寺という性格を強めつつ、近世へと向かうのである。

〔註〕

- (1) 清水寺史編纂委員会編『清水寺史 第一巻 通史(上)』(音羽山清水寺、一九九五年)三六九頁。『清水寺史』は他に『清水寺史 第二巻 通史(下)』(一九九七年)、『清水寺史 第三巻 史料』(二〇〇〇年)が刊行されている。以下、『通史(上)』『通史(下)』『史料』と略す。
- (2) 『通史(上)』三七〇～三八八頁。
- (3) 『史料』六五頁。
- (4) 辻善之助『足利尊氏の信仰』(『日本仏教史之研究』金港堂、一九一九年)、『日本仏教史研究 第二巻 日本仏教史之研究 正篇 下』岩波書店、一九八三年として再刊。
- (5) 高橋慎一朗『空間としての六波羅』(『中世の都市と武士』吉川弘文館、一九九六年、初出一九九二年)。
- (6) 『前田家所蔵文書』(『史料』六九～七〇頁)。
- (7) 『群書類従』二二、二〇三～二〇四頁。
- (8) 『通史(上)』三〇六～三〇七頁、『通史(下)』二八～二九頁。
- (9) 拙稿『室町幕府年中行事書にみえる僧侶参賀の実態』(『遙かなる中世』一九、二〇〇一年)。
- (10) 『史料』八九～九〇頁。
- (11) 小泉恵子『松梅院禅能の失脚と北野社御師職』(『遙かなる中世』八、一九八七年)、遠史香『南北朝期の石清水八幡宮祠官家と幕府政策―足利将軍家八幡御師職の成立をめぐる―』(『ヒストリア』一五六、一九九七年)、小杉達『祇園社の御師』(『神道史研究』一九一、一九七一年)、三枝暁子『南北朝期京都における領域確定の構造―祇園社を例として―』(『日本史研究』四六九、二〇〇一年)。
- (12) 『通史(上)』三〇七～三〇八頁。
- (13) 『表』の宛所に「兵部卿」とある文書が三点あるという事実は、これらが同一の坊を指す可能性を示す。慈心院は近世にも「兵部卿」を名乗った例がある。『通史(下)』二九一～二九二頁。
- (14) 他に『慈照院殿年中行事』(『史料』九二頁)など。
- (15) 瀬田勝哉『中世の祇園御霊会―大政所御旅所と馬上役制』(『洛中洛外の群像 失われた中世京都へ』(平凡社、一九九四年、初出一九七九年)、山本隆志『北野神社松梅院とその文書―「北野天満宮寄進状壹巻」を中心に―』(筑波大学附属図書館特別展「学問の神」をささえた人びと―北野天満宮の文書と記録―、二〇〇二年)。
- (16) 『新修京都叢書』一〇、五九六頁。
- (17) 『新修京都叢書』一五、四九頁。
- (18) 加藤基樹『近世京都の民衆信仰―清水寺慈心院と随求菩薩信仰―』(『大谷大学大学院研究紀要』二〇、二〇〇三年)。
- (19) 『拾遺都名所図会』(『新修京都叢書』七)一六〇頁。
- (20) 『名所都鳥』(『新修京都叢書』五)九六頁、『都名所車』(『新修京都叢書』五)四九八頁、『拾遺都名所図会』(『新修京都叢書』七)一六〇頁、『出来齋京土産』(『新修京都叢書』一一)五四八頁。元文三年刊『清水境内寺社由来記』(西尾市岩瀬文庫蔵、8413) 轟の橋の項には、「此石はし三年坂の下にかかれり、またふくろ水の傍なる橋をも云也」とある。ふくろ水とは、本堂西側入り口にある手水鉢のこと。
- (21) 『京都坊目誌』(『新修京都叢書』二二)一七三頁、『京都市の地名』(平凡社、一九七九年)二四七頁。
- (22) 『史料』二九頁、『通史(上)』二〇九頁。
- (23) 『新日本古典文学大系59 舞の本』二七二頁。

- (24) 『新日本古典文学大系43 保元物語 平治物語 承久記』二四二頁。
- (25) 『成就院文書』『清水寺文書』(史料)一四七頁、『通史(下)』九三、九五頁。
- (26) 大石雅章「中世南都律宗寺院と七大寺祈禱」(『日本中世社会と寺院』清文堂出版、二〇〇四年、初出一九九八年)。
- (27) 『史料』七六頁。
- (28) 東京大学史料編纂所架蔵写真帳G17.0847.3。
- (29) 明治二十八年(一八九五)刊の『京華要誌』(『新撰京都叢書』三)一七五頁に、慈心院の名は明応元年後土御門帝から賜ったとあるのは、史料7の祈禱命令を根拠にしている可能性がある。
- (30) 京都国立博物館編『京都社寺調査報告 12(清水寺)』(京都国立博物館、一九九二年)番号183-8、明応元年十一月十五日(関白家)御教書(写)。
- (31) 註11三枝氏論文。
- (32) 原田正俊「五山禅林の仏事法会と中世社会―鎮魂・施餓鬼・祈禱を中心に」(『禅学研究』七七、一九九九年)。
- (33) 『増補続史料大成』による。
- (34) 『蔭涼軒日録』文明十九年六月二十日条に「諸五山毎月修懺之時宜、相尋可レ白之命有レ之」とある。
- (35) 註32原田氏論文。
- (36) 拙稿「禅宗の祈禱と室町幕府―三つの祈禱システム―」(『史学雑誌』一一三―一一二、二〇〇四年)。
- (37) 国立公文書館内閣文庫蔵和学講談所旧蔵本(192-0627) および林家旧蔵本(192-0628)。
- (38) 『大日本史料』九ノ八、四一四、四一六頁。
- (39) 玉村竹二「五山禅僧伝記集成」(講談社、一九八三年)四七一頁。
- (40) 『御前落居奉書』所収永享三年五月二十日室町幕府奉行人奉書(『史料』七三頁)によれば、美濃国墨俣も懺法料所として設定されていた。
- (41) 『蔭涼軒日録』長祿三年十月十五日条、寛正三年四月二十八日条。
- (42) 現在の本尊は、鎌倉中期の作と考えられる。『通史(上)』一九五―二〇六頁。
- (43) 『二水記』(『大日本古記録』による)大永七年六月十七日条に「辰刻詣清水寺、(中略)今日為二縁日一男女継踵者也」とある。
- (44) 『続群書類従』補遺一による。
- (45) 『通史(上)』二一八―二一九頁によれば、鎌倉時代の清水寺では「懺法衆」と「惣寺僧」が対立し、「懺法僧」が処分されたい。室町時代に懺法を行った南禅寺僧はこれに代わるものとも考えられる。
- (46) 玉村竹二「足利義持の禅宗信仰に就て」(『日本禅宗史論集 下之二』思文閣出版、一九八一年、初出一九五二年)。
- (47) 『蔭涼軒日録』永享十二年六月六日条(『史料』七四頁)。
- (48) 村尾元忠「足利義持の神仏依存傾向」(安田元久先生退任記念論集刊行委員会編『中世日本の諸相 下巻』吉川弘文館、一九八九年)。
- (49) 『満濟准后日記』応永二十九年四月九日条、応永三十四年十一月二十四日条。野地秀俊「中世後期における鞍馬寺参詣の諸相―都市における寺社参詣の一形態―」(『京都市歴史資料館紀要』一八、二〇〇一年)によれば、鞍馬寺では、宿坊が参籠そのものをする場となり、宿坊から本堂にお参りに行くという形がとられたという。
- (50) 新城常三「新稿 社寺参詣の社会経済史的研究」(塙書房、一九八二年)一五二頁。
- (51) この点については従来不明とされていた。『通史(上)』二三二頁、竹貫元勝「新日本禅宗史 時の権力者と禅僧たち」(禅文化研究所、一九九九年)二六七頁。
- (52) 林譲「南北朝期における京都の時衆の一動向―靈山聖・連阿弥陀仏をめぐって―」(『日本歴史』四〇三、一九八一年)、高田陽介「戦国期京都に見る葬送墓制の変容」(『日本史研究』四〇九、一九九六年)、勝田至「鳥辺野考」(大山喬平教授退官記念会編『日本社会の史的構造 古代・中世』(思文閣出版、一九九七年)。
- (53) 『新修京都叢書』一四、二三〇頁および二四〇頁。
- (54) 『改訂増補故実叢書』三八。
- (55) 東京大学史料編纂所架蔵謄写本 2016-69。

- (56) 大洋社発行本による。
- (57) 『醍醐寺文化財研究所研究紀要』一三。
- (58) 『史料』七〇頁。
- (59) 法系は、玉村竹二『五山禅林宗派図』(思文閣出版、一九八五年)一五九頁によれば次の通り。
古菴―極先―貞叟―笑鄂―勉仲
―玄峯
- ただし、『天龍宗派(両足院本)』(東京大学史料編纂所架蔵謄写本 2016-439)では、勉仲を笑鄂と並んで貞叟の弟子とする。
- (60) 『蔭涼軒日録』永享十一年四月四日条、寛正六年三月十五日条。
- (61) 註59『天龍宗派(両足院本)』。
- (62) 『扶桑五山記』(臨川書店)一八三頁、『東山歴代』(東京大学史料編纂所架蔵謄写本 2016-526)、『蔭涼軒日録』文明十九年八月二十七日条。
- (63) 『蔭涼軒日録』永享十一年五月十六日条、六月二日条。
- (64) 『蔭涼軒日録』寛正三年四月二十八日条。
- (65) 『蔭涼軒日録』寛正五年四月二十二日条、四月二十三日条。
- (66) 『建内記』(『大日本古記録』による)嘉吉元年九月二十九日条。
- (67) 『通史(上)』二四二―二四四頁。
- (68) 『子安観音縁起絵画伝』(『清水』一三二、一九九八年)。
- (69) 『通史(上)』二四四―二四六頁。
- (70) 東京大学史料編纂所架蔵謄写本 2015-5253。
註9 拙稿。
- (71) 『大日本史料』六ノ一〇、二四六頁。
- (72) 太田博太郎『五山の建築』(『社寺建築の研究』岩波書店、一九八六年)。
- (73) 『大日本史料』六ノ一〇、二四九―二五〇頁。
- (74) 東京大学史料編纂所架蔵謄写本 2016-439。
- (75) 『京都坊目誌』(『新修京都叢書』二二)一四八頁に「北斗堂ノ址 清水四町目北側中央の地なり」とある。『山州名跡志』(『新修京都叢書』一五)五四頁ではさらに詳しく「古老ノ云々、舊地、三年坂ノ上ヨリ到ル六道ニ、右ノ方、藪ノ角ヨリ二十四五間西、大路ノ北、六七間ノ地也」とする。
- (76) 『天文十四年日記』(『ピブリア』七六) 天文十四年七月二十九日条。
- (77) 色井秀讓『戒灌頂の入門的研究』(東方出版、一九八九年)一四頁。
- (78) 『元心寺記録』(東京大学史料編纂所架蔵謄写本 2016-3) 所収。
- (79) 註78色井氏著書三六―三七頁。
- (80) 註78色井氏著書三三頁および二一九頁。
- (81) 松尾剛次「恵鎮円観を中心とした戒律の「復興」―北嶺系新義律僧の成立―」(『勸進と破戒の中世史―中世仏教の実相―』吉川弘文館、一九九五年、初出一九九〇年)。
- (82) 下坂守「中世非人の存在形態―清水坂「長棟堂」考―」(『描かれた日本の中世―絵図分析論』法蔵館、二〇〇三年、初出一九八九年)。
- (83) 今枝愛真「足利直義の等持寺創設」(『中世禅宗史の研究』東京大学出版会、一九七〇年)。
- (84) 註84今枝氏論文、拙稿「空間から見た室町幕府―足利氏の邸宅と寺社―」(『史学雑誌』一〇七―一二、一九九八年)。
- (85) 註82松尾氏論文。
- (86) 『山州名跡志』(『新修京都叢書』一五) 五五頁に「北斗堂ヨリ至テ北、珍聖寺、地藏田、無量寿、月灯坊、遠藤塚等ノ字アリ」とある。地藏田という字は神護寺との関係を推測させる。
- (87) 黒田智「鎌倉」と鎌足」(鎌倉遺文研究会編『鎌倉期社会と史料論』東京堂出版、二〇〇二年)。
- (88) 『通史(上)』二〇四―二〇五頁。
- (89) 『伺事記録紙背文書』長祿四年閏九月十一日室町幕府奉行人連署奉書案(『室町幕府文書集成 奉行人奉書篇 上』五八七号、『御前落居記録』永享三年九月六日条(『室町幕府引付史料集成 上巻』二六―二七頁))。
- (90) 『蔭涼軒日録』寛正三年十二月九日条。
- (91) 赤松俊秀監修『泉涌寺史 本文篇』(総本山御寺泉涌寺、一九八四年) 一九〇頁、『満濟准后日記』永享四年十月二十一日条。
- (92) 金子拓「室町殿東寺御成のパススペクティヴ―永享十一年義教御成を中心に―」(『中世武家政権と政治秩序』吉川弘文館、一九九八年)。
- (93) 『蔭涼軒日録』永享十一年六月十七日条、六月十八日条、六月二十六日

- 条、九月二日条、九月四日条、九月六日条。
- (95) 『統群書類従』三〇下、二七七頁。
- (96) 『玉葉』(『図書叢刊』による) 承安四年十月二十五日条、村山修一『日本陰陽道史話』(平凡社、二〇〇一年、初刊一九八七年)二七四頁。
- (97) 『通史(上)』二二二頁では、北斗堂を清水寺の伽藍に含める。謡曲『熊野』(『史料』四三九〜四四〇頁)では、六道の辻、鳥部山に続いて「北斗の星の曇りなき」とあり、経書堂、子女の塔を経て清水寺に至る。『諸国一見聖物語 曼殊院藏 粉河寺藏』(京大大学国語国文資料叢書)の冒頭には、「至徳四年六月上旬ノ初二清水寺へ参詣シテ下向ノ道北斗堂ノ辺ニ事ノ縁有テ立寄タリシニ」とある。なお、跋文には、曼殊院本が「清水坂北斗堂」、粉河寺本が「清水寺北斗堂」とある。
- (98) 『統群書類従』補遺二による。
- (99) 富島義幸「五大堂の形態変化と五壇法の成立―密教空間に関する一考察―」(『建築史学』三三、一九九九年)。
- (100) 西弥生「中世社会と密教修法―北斗法を通して―」(『日本女子大学大学院文学研究科紀要』八、二〇〇二年)。
- (101) 『通史(上)』二六七〜三〇二頁、下坂守「中世的「勧進」の変質過程―清水寺における「本願」出現の契機をめぐって―」(註83下坂氏著書、初出一九九一年)。
- (102) 『鹿苑日録』(大洋社発行本による) 明応七年正月十八日条、二月十四日条。
- (103) 『八條宮文書』(『大日本史料』八ノ二八、四三三頁)。
- (104) 『蔭涼軒日録』延徳三年十一月二十一日条。
- (105) 『蔭涼軒日録』長祿二年十二月二十日条、長祿四年三月二十日条、寛正二年十月二十三日条など。
- (106) 『蔭涼軒日録』寛正二年四月二十一日条。
- (107) 『蔭涼軒日録』長享二年九月二十六日条、『伺事記録紙背文書』文亀二年八月三日足利義澄御判御教書案(増訂加能古文書)四七〇〜四七一頁にそれぞれ「清水坂之神護寺」「清水坂神護寺」と見える。
- (108) 『二水記』享祿四年正月二十一日条に「東山法勝寺・神護寺等同焼失云々、律家古所也、可レ惜々々」とあり、この時にはすでに法勝寺の近くに移転していたことがわかる。その位置については、『山城名勝志』(『新修京都叢書』一四)一一三頁に「舊跡在鹿谷村南・光雲寺北、其地田字號「神護寺」とある。
- (109) 庶民信仰の様子をよく示すが、十六世紀半ばと後半に作成された二つの『清水寺参詣曼荼羅』である。『通史(上)』三一〜三一九頁、下坂守「参詣曼荼羅の空間構成―『清水寺参詣曼荼羅』を素材として―」(註83下坂氏著書、初出一九九一年)。